救いを見る　　**ルカ 2:25〜35**

私が蛍池聖書教会に赴任して 15 年間と半年が過ぎました。50 歳の時です。最初は前任の若狭先生と礼拝説教を交互に行っていました。時々、若狭先生が説教の中で 50 年前の出来事を話された時に、あまりにも昔のこと過ぎて全くイメージ出来ませんでした。しかし、最近ふと自分が中学や高校時代の話しをする時、よくよく考えてみればほぼ 50 年経っているんですね。年月の過ぎるのは、あっと言う間です。自分の若いころのことは、まるで昨日のことのように思い出せます。でも実際は長い年月が経っているんですね。そしてふと思うのです。「私は、その間、今までどうやって過ごしてきたんだろう。」と。若いころ、年配の人を見ても、自分がああなるのは随分先のことだと思っていました。しかし、今、友人や知人はみんな退職して、髪の毛が白くなり、みんなのろのろ歩いています。これからも基本的には今までと同じように何かをしながら生きてゆくことでしょう。ただ日に日に体や心が弱ってゆくことがあっても若く元気になってゆくことはありません。その意味において人生の新しいステージに入っているのです。ポール・トゥルニエは人生を「春、夏、秋、冬」の四つの季節に分けました。高齢の方は季節で言うなら「冬」の期間です。時代と共に「冬」の期間が長くなっています。アメリカには、百歳以上の人が世界で一番多くいまして、その数は昨年 104,800 人です。二番目に多いのは日本で昨年は 80,450 人です。けれども、アメリカの人口は日本の三倍近くですから、人口の比率から言えば、日本が百歳以上の人が世界でいちばん多い国になります。しかも日本はその前年から 1 年間で約 9,100 名増えています。ですから人生の冬をどのようにして過ごすかについてはよく考えておく必要があります。

ある時、高齢者の施設で働いている人と話すことがありましたがその人は「ふだんはぼんやり過ごしている高齢の方々も、こどもにおりがみを教えたりしているときには目を輝かせます。ですからそんな機会をもっと与えてあげたいと思います」と話していました。たしかに高齢の方々が、自分にはまだしなければならないことがある、自分は役に立っているという思い、いわゆる「生きがい」を持つことは大切なことです。しかし、「生きがい」以上に、「生きる意味や目的」を持っていないと、その人が「生きがい」としているボランティア活動や趣味、孫の世話などが、健康上の理由で出来なくなったとき、たちまち生きる喜びや感謝を失ってしまいます。私たちには「生きがい」という精神的なものばかりでなく、「生きる意味や目的」、さらには「生きる力」といった霊的なもの、魂に関わることを準備する必要があります。

聖書は、私たちの地上の限られた人生は、天での永遠の人生への準備であると教えています。私たちの人生は「春、夏、秋、冬」の四季を通りますが、「冬」で終わるのではありません。人生の「冬」のあとには天の「春」が待っています。人生の冬の期間には、天の春に備えるという仕事があるのです。最近、社会は「死」について考えるようになってきました。終活ですね。大切なことですからエンディングノートに記入してお渡しいただければと思います。ただよく考えますと終活とは自分の「葬式」をどのようにするかということですから言わば「葬儀の演出」です。しかし「葬儀の演出」と「死」に備えることはまったく別のことです。死とは何なのか。人はなぜ死ぬのか。死はどこから来たのか。死を克服する道はあるのか。そういったことを真剣に問い、天を目指す旅を、最後の一歩まで歩みきること、それがほんとうの意味で、死に備えることになります。これこそ、永遠の「春」への希望を確かなものとするために、冬の期間にしておかなければならないことなのではないでしょうか？

では「死」に備える、最善の準備とは何でしょうか？　それは今朝の聖書のことばを使って言うなら、「救いを見る」ことです。神の救いを待ち望んでいたシメオンは、赤ちゃんのイエスを抱き、「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべをみことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです」(29-30 節）と言いました。「私は救いを見ました。これで、私は安らかに死ぬことができます」とシメオンは言ったのです。「安らかな死」、それは、神の「救いを見る」ことによってはじめて与えられるのです。「死」は罪から来ます。ローマ 6:23 に「罪から来る報酬は死です」とある通りで

す。しかし、神は、死ぬべき人間をあわれんで、たとえ、一度はからだの死を体験しても、その霊は永遠に神と共に生きる道を開いてくださいました。それが、イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しと永遠のいのちです。キリストは、ほんとうは私たちが受け取るべき罪の報酬を私たちに代わって受け取り、罪の償いを果たし、私たちに赦しを与えてくださいました。そればかりでなく、復活によって、私たちを死の束縛から解放し、永遠のいのちを授けてくださいました。それでローマ 6:23 は、「罪から来る報酬は死です」と言ったあと、「しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」と力強く、永遠のいのちを宣言しているのです。もし、聖書が「罪から来る報酬は死です」だけで終わっていたら、それはなんと悲しく、絶望的なことばでしょう。しかし、聖書は、イエス・キリストから来る「永遠のいのち」という福音で、その文章を締めくくっています。聖書は、このように、イエス・キリストにある救いの出来事を告げ知らせる書物なのです。

イエス・キリストの救いは、人類の歴史のただ中でなされ、誰の目にも明らかなのに、なぜ、人々はこの救いを「見る」ことをしないのでしょうか。それは、罪の赦しや永遠の命を切実に求めていないからです。人は、自分の興味のあるものには目ざとく、決して見逃しませんが、興味のないものは、たとえ、目に入っていても、「へぇ、そんなものあったのか…」と心に留まらないことが多いのです。しかし、大きな失敗を犯したとき、自分のせいでトラブルが起こり、それに巻き込まれたときなどは、自分の罪深さや惨めさを思い知らされます。そんなときには、ふだん見えていなかったキリストにある罪の赦しが見えて来ます。また、余命いくばくもないことを知ったとき、生きるか死ぬかという瀬戸際に立たされたとき、愛する者の死を体験したときには、人はふだんは考えなくても、その霊においては求めているし、永遠のことがらに目を向けはじめます。人は年をとると、視力が衰え、目も霞んできます。若いころは、目で見たことがそのまま写真のように頭脳に焼き付けられたのに、年齢を重ねると、それがまるでピンボケの写真のようにしか頭脳に写らなくなります。しかし、信仰者のたましいの目は、年齢を重ねることによってさらに開かれてきます。シメオンは、イエスの説教を聞いたわけではありません。病気をいやし悪霊を追放する力あるわざを見たわけでもありません。ましてや十字架や復活は、シメオンが生後 40 日目のイエスを抱いたときから 30 年以上も先のことです。なのに、シメオンは赤ちゃんのイエスの中にすでに救いを見ていました。シメオンの信仰の目は研ぎ澄まされていたのです。シメオンが「私は救いを見ました。これで、私は安らかに死ぬことができます」と言ったように、ご高齢の方々には、イエス・キリストの救いをしっかりと「見る」という大切な仕事が残っています。これをしないではこの世を去ることはできません。ご高齢の方々がキリストの救いを「見る」幸いを体験してくださるよう、心から願い、祈ります。

また、すでにイエス・キリストを「見て」いる方々は、もっと、イエス・キリストを見つめ、イエス・キリストの中にある救いの豊かさを味わい続けていただきたいと思います。そのようにして、キリストの救いを見ているみなさんが、他の人々に救いを「見せる」人になっていただきたいと思います。シメオンはまた、幼子イエスについて、「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています」（34 節）と語りました。ここで「しるし」と言われているのは「十字架のしるし」のことです。十字架は、本来はのろいと滅びの「しるし」ですが、それはイエスによって救いと祝福の「しるし」となりました。この「しるし」という言葉は、もとの言葉で「セーメイオン」と言います。「シメオン」という名前と「セーメイオン」はとても似ています。シメオンは「聞く」という意味です。シメオンは「主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた」26 節とあるように神の声を聞いていたのです。そしてしるしを見ました。イエスの十字架は救いのしるしですが、シメオンもまた、その救いのしるしを指し示す「しるし」となったのです。年老いても、ひたすらにイエスを見つめて歩み続け、み言葉を聴き続ける、みなさんの信仰の歩みが、多くの人々にとって救いの「しるし」となりますよう、心から祈りたいと思います。